『沈む氷』

第一章　高萩への赴任

一

小柳千春は高萩中央署の裏庭にいた。空には真夏の太陽が容赦なく照りつけている。千春は駐車場に停めた車に近づくとドアをあけた。炎天下にとめていた車の室内からは、ムッとする熱気が吐き出された。一瞬、顔をしかめた千春ではあったが、そのまま室内に入った。

茹だるような暑さに千春の身体からは、あっという間に汗が噴き出した。

「こりゃ、暑いわ」

千春は小さな声で独り言を口にしながら、キーを回しエンジンをかけ警察署をでた。

小柳千春の勤務する高萩中央署は、茨城県北部高萩市にある小さな警察署であった。

高萩市は、東側は太平洋に面し海岸線に沿って広がる平地に市街地を形成しているが、西に数キロ向かえば多賀山地から伸びる標高四、五百メートル位の小高い山岳地帯となり、高低差を持つ自然豊かな地形をしている。高萩中央署は、すぐ近くに海を望める市街地のなかに置かれていた。

千春は市街地を抜けると、国道四六一号線に車を向けた。国道四六一号は高萩から、ほぼ東西に走る国道である。そのために市街地を抜けて西に少し走れば、山沿いの道になる。そのまま山沿いの道を西に進むと隣接する大子町（だいごまち）に行ける。大子町に入ってすぐのところに、茨城県の観光地として有名な袋田（ふくろだ）の滝（たき）がある。

千春の運転する車は僅かな時間で、市街地を抜け山地へと向かった。両側に山林を抱きながら、しばらく走ると車は農村地帯へと出た。

この辺りは、高萩市と大子町との境に近く、ちょうど袋田の滝の上流に位置した山間部の小さな集落が幾つかある場所になる。集落を過ぎると千春は、車を国道から山裾を走る細い道路へと進めた。すでに何度か走っているのだろう。迷いのない運転であった。

やがて千春は人気のない山中で車を停めると、車の中で上着やネクタイを外し車からで

た。千春は車のトランクから運動靴を取り出し、履いていた革靴と履き替えながら周囲を見回した。周囲には走る車もなければ、人の気配もなかった。そこは静かな山間の奥まった場所であった。

自分を納得させるように、一つ頷いた千春は車のトランクから、リュックザックを取りだして背負った。ついでに首に白いタオルを一本、無造作に引っかけると、とめた車のそばから延びる細い山道に向かって歩き出した。

「全く、何で彼奴(あいつ)なんだ。叔父貴(おじき)もどうかしている」

小柳千春、何かその名前からは、女子を思わせるような弱々しい響きがあるが、千春は高萩中央署に務める三十二になる男子警察官であった。ただ、警察官としては、それほど上背もなく、少し長目の髪に人の良さそうな顔をしているために、私服で歩いている千春を見て警察官だと見る人は、そうはいないだろう。その千春が、ぶつくさと訳の判らない独り言を呟きながら、細い山道を歩いていた。

いつしか細い山道も途絶えた。それでも千春は僅かに残る道らしき跡を頼りに、更に山奥に進んで行った。

歩いている道は細い山道のため木々が覆い被さり、おおかたは日陰であった。しかし、真夏の日中であるのに変わりはない。汗(あせ)が迸(ほとばし)る。千春は首に掛けてきたタオルで時折、吹き出る汗を拭った。

しばらくすると覆い被さっていた木々がぽっかりと空き、青空が広がった場所にでた。

青空の下には、空を写した沼が山の中に横たわっていた。千春は、沼の岸辺で立ち止まると、沸き上がる額の汗をタオルで拭きながら、注意深く周囲を見回していた。

夕刻、署に戻ってきた千春は刑事課の向かいにある、刑事課分室と表示された部屋に入った。刑事課の分室、おかしな名称を持った部屋であるが、それには理由があった。

小柳千春は、元々は警視庁に勤務していた。千春の転勤については、当初、人事を司る警察庁から打診をうけた高萩中央署の長沢署長も困惑を隠せなかった。警視庁で何があったのかは知らないが、小柳千春は公務員一種試験に合格したキャリアであり階級は警視。まだ若いと云え階級だけ見れば小さな警察署であれば、署長にも就ける階級にある。

小柳千春の移動は通常の人事異動とは異なっていた。警察庁人事課からは、茨城転勤は本人たっての申し出につき、部署は何処でもよいから、受け入れて貰えないかという、おかしな話で舞い込んできた。

当初、長沢署長も次長職程度のものは必要かと考えていたが、本庁からは、それには及ばないとの話もあり、そこで長沢は苦肉の策として、刑事分室課長との肩書で千春を受け入れた。それは今年の春先の事であった。

刑事課長の大杉幸雄も、そのときは困ったと思った。しかし、署長の計らいで直接刑事課と距離をおく一人課長であれば、余計な人間が一人増えた程度に思えばよかっただけに、小柳千春に関しては拘わりを持たないような形で、当初は仕事を進めていた。

始めて署員の前に立った小柳千春を見た時の署員の感想は、それほど上背はないが、顔は、それなりに整っている。しかし、警察官が持つ精悍さや力強さとのイメージからは離れていた。無造作に伸ばした少し長目の髪、大きな二重瞼の目と男にしてはやや長い睫毛。そして眉も決して濃くはない。これらが千春の顔から力強さを奪い、穏和な表情に見せていたのかも知れない。まあ、人を安心させるような顔、それが高萩中央署の署員が千春を

見たときの第一印象であったようだ。それだけに警視庁の捜査課にいた風格なども、微塵も感じられないというものであった。

そんな人の良さそうな顔をした千春であったが、好奇心が旺盛で何にでも首を突っ込んでくる男であった。最初は、うっとうしく感じた署員も千春と云う男を知るにつけて、結構気さくな良い青年であると知り安心をした。

千春の良いところは階級を意識させない人柄と、温和な人当たりであった。長い話でも、うん、うんと頷き話を聞き話の腰を折ったり、自分の意見を強く主張するでもない。それでいて捜査員などが、見落としているようなものには良く気づく。しかも、それらを話すときでも、何気なく話のなかに織り込んでくる。それが自然であるから、相手もなるほどと感じ、妙な反感を覚えたりしない。

その様な性格が幸いしてか、高萩中央署にきて日は浅かったが、今では、春さんと呼ばれ署員のなかに、すんなりと溶け込んでいた。刑事課長の大杉でさえ、人手が足りないときなどは、気軽に応援を求める間柄になっていた。

その大杉が数日前に、また、署長の長沢に呼ばれた。長沢は角張った厳つい顔に、何処か笑いを忍ばせた、意味深な表情で小柳千春について聞いていた。
千春が警察仲間と、うまくやっていると大杉が告げると、長沢はホッとしたのか笑顔を見せて、それは良かったと返事をした。
「なあ、大杉君、あと一人面倒を見てもらえないか？」
大杉はえっと思って長沢を見た。長沢は少し困った顔をしていたが、その顔には笑いが含まれていた。捜査畑にいる大杉にすれば、捜査に当たれる人間が増えるのは歓迎であった。ただ、署長の笑いを含んだ顔は、曲者だと知る大杉は自然と身構えた。
「署長、また本庁ですか？」
少し大杉は眉をひそめながら長沢に尋ねた。
「まあ、そんなところだ」
小柳千春は良かった。しかし、今度も小柳の様な気さくな男がくるとは限らない。それにしても、またも本庁からというのも、おかしな話しだと思った。
「今度は、女だ」

長沢が申し訳なさそうに大杉に述べた。ここまできたら既に話は決まっているとはいえ、女子と聞いて大杉も多少戸惑った。
「また、キャリアさんですか？」
「そうなるな」
長沢が顔に苦笑いを浮かべ、とぼけた調子でいった。
「本庁人事の兼松は、俺の同期なんだ。なんとか頼まれてくれないか？」
「定期異動でもない時期ですよ。問題を抱えたキャリアさんじゃないでしょうね」
「それはないと思う。結構優秀だとは聞いているが、まあ本庁の考えだ。良くはわからない」
「……いやですよ。性格に問題があるような女では？」
「大丈夫だろう。兼松も、小柳君に特別室を与えていると話したら、そこに押し込めば良いだろうと言ってきた」
「小柳君と同じ部署にするのですか？」
「まあ、そのように考えている。仕方ないだろ。今度来る女子は警視正だからな」

「小柳君の上司という訳ですか？」
「それで良いと思うのだが」
階級では、今度くる女子の方が大杉よりも上になる。正直、余り歓迎できる話しではなかった。ただ、ここまで長沢が話したからには、すでに話しは上層部で決まっている。これは単なる所長からの報告であり、大杉が嫌だといっても、今更変わるものでもないと思うと、大杉は渋々ながらも署長の言葉に頷くしかなかった。
署長室から戻ると大杉は千春の部屋に行き、署長からの話を伝えた。
その話を聞き千春の表情が次第に曇っていくのを、大杉は不思議そうに見ていた。
「どうした、春さん？」
「……悪夢か、これは」
「悪夢？　なんだそれは？」
「堂本美佐子だけは、いかんです！」
普段、温厚な千春には珍しく、吐き捨てるようにいった。
「いかんといってもな、それより春さんは、堂本美佐子を知っているのか？」

その様子に、少し驚きながら大杉は聞き返した。
「知っています。幼なじみですから」
「それなら、何も問題はあるまい」
「だから駄目なんです」
二人の関係はよくわからないが、すでに決まった事である。
「まあ仕方あるまい。上が決めたものだ。うまくやってくれよ」
温厚な千春がこうも嫌がる姿勢を見せるだけに、大杉は多少不安な気持ちになった。

二

二週間後、高萩中央署に堂本美佐子が赴任してきた。署員を前に署長から紹介された美佐子は、誰の目にも均整の取れたスタイルに黒髪が、良く似合う美しい女性に映った。新任の挨拶も、これといった気負いもなく、そつなくまとめた上手い挨拶をしていた。そこからは、さすがキャリアと思わせるものがあった。
千春から話しを聞いていた大杉は美しいという事を除けば、これといって問題を起こす

ような女性とも思えず、ちらりと千春の様子を見た。そこには口を少し尖らし気味にした浮かない顔で、美佐子の挨拶を聞く千春の姿があった。

しばらくすると赴任の手続きなどを終えた美佐子が、千春の居る刑事課分室に入ってきた。しかし、千春は、その姿を無視して書類に目を向けていた。

「おい、こら、逃げたな」

近づいてきた美佐子が、その美しい顔とは似ても似つかない、乱暴な言葉を千春に浴びせてきた。千春は、それでも無視を続けていた。

「ほう、千春、そんな態度をとっても良いのか？　いいか、少なくとも私は、あんたの上司、警察署のなかではそんな態度、許さないよ」

透き通った美しい声ではあるが、棘(とげ)のある言葉である。耳の後ろに指を置き、耳を少し押しては戻す。困ったときや考え事をするときの千春の癖であった。

耳を二度、三度指で動かした千春は、仕方なさそうに立ち上がると、ぼそっと何かを言って頭を下げた。

「声が小さい！」

鋭い美佐子の声が向けられた。
「はい、はい、よろしくお願いします」と無表情にいうと、再び千春は頭を下げて座った。その様子に美佐子は、美しい顔に冷笑を浮かべ、満足そうに頷いていた。

千春は警察庁に電話をしていた。
「叔父貴、どうして相棒が、彼奴なんですか？」
「どうしてと云われても困る。相棒を探していたのは、お前だろう」
「それはそうですが、彼奴はないですよ」
「おいおい、千春、彼奴といっても彼女は去年、昇進して今ではお前より階級は上だ。彼女が優秀なのは、お前も知っているだろう。これでも私は努力をしたつもりだよ」
「……有り難うと云うべきか、困ったと云うべきか」
「しょうがないだろう。人選をしているとき、彼女の方から話しがあったそうだ。これまでお前達は、警視庁で難事件を幾つも解決してきた。それを評価されてだから、お前にも悪い話しではない」

「良くないですよ」
「優秀なコンビだったのだろう。その噂なら俺も聞いている。そんなコンビを警察としてもすんなり、解散させる訳にもいかなかったのかもな。コンビはコンビとして一カ所に置けば、いつでも使える」
「そのコンビを解消したかった……」
「しかしな、彼女の評判は警視庁でも良かったぞ」
「……まあ、美佐子は人前ではうまく立ち回るからな」
「お前達は、そんなに相性が悪かったのか？」
「最悪ですよ」
「そうか、しかしな、お前が茨城に行き、彼女もションボリしていたと聞いた」
「意味が違いますよ。虐める相手が居なくなって、困っていたのでしょう」
「お前が彼女に頭が上がらない、そのような話しも聞いている。ただ、お前、それじゃ情けないだろう。自分で、そうは思わないのか？」
「叔父貴も知っているでしょう。全て知っているんですよ、美佐は」

「それはそうだが、まあ、これは仕事、諦めろ」

千春が電話をしている相手は、警察庁のお偉方である刑事局長の柿岡周五郎であった。柿岡は千春の叔父にあたる。千春の家と美佐子の家は隣同士であったので、柿岡も美佐子を小さな時から知っていた。

今、こうして話している二人であったが、そもそも警察に来いと、千春に声を掛けたのは柿岡であった。子供の時から千春を見ていた柿岡は、当初、千春は警察には向かない男だと思っていた。

小さい頃の千春は素直に人の話は聞くが、あまり自分からは話さない。それでいて神経質かと言えばそうでもない。あまり悩んでいる様子もなく、それどころか話しの合間に見せる人懐こい笑いには、何か人を和やかにするものを持っていた。何処にでもいる普通の子供というのが、柿岡の見ていた子供時代の千春であったが、その分、警察に必要とされる闘争心や力強さは感じられなかった。

その千春が鋭い分析力を持っていると気づいたのは、千春が大学に入り、柿岡の家の近

くから、大学に通うようになってからであった。学生で金のないのは誰でも同じである。柿岡は、何かと理由をつけては、千春を家に呼び食事を振る舞っていた。そのために話す機会も増えた。それからであった。人の思いつかないような事を、平気で考える千春に、柿岡はオッと思うものがあった。いや、面白いと思った。

そのときから柿岡は、千春の持つ一種独特な考え方や、その元になっている分析力などは、十分警察の捜査でも使えると考えるようになった。ただ、その独特の考えの為か、千春が就職を決める頃は、丁度就職氷河期と重なった事もあり、千春も就職には手を焼いていた。それを知った柿岡は、千春に警察官僚になるのを勧めた。

三

しばらくすると美佐子は、千春のおかしな行動に気づいた。

「千春、お前時々、姿を消すな。何をしている」

「やめろよ。幾ら二人の時でも千春はないだろう。まあ、美佐の方が階級は上、それは認める。だからといって呼び捨てはないだろう、せめて小柳君とでも呼んでくれないか」

「小柳君？　馬鹿らしい」
「なら勝手にしな」
「それより、何故、時々姿を消す。女でも出来たのか？」
「それこそ馬鹿を云えだ、仕事中だぞ。仕事があるから外にでているだけだ」
「私は、あんたの上司だ。理由をいえ」
「厭だ、話さない。僕を首にしたいならすればいい」
「そうか、それなら勝手にしな」
いつも二人が部屋に居るときは、こんな調子であった。

美佐子が赴任して一ヶ月が過ぎた。すでに暑い夏も終わり高萩の町には秋風が吹き出していた。千春は、十時位に署をでると市内を横切って山岳地帯へと車を向けていた。夕方になると千春は署に戻ってきた。
「千春、山の中で何をしてきた」
帰った千春に美佐子が、冷たい表情で問うた。

千春の顔が曇った。心の中で此奴(こいつ)、やったなと思い舌打ちをした。
「国道四五一号を進むと袋田まで行ける。……何を企んでいる？」
「お前な、車両に発信器をつけたな」
美佐子が小さな口許に笑みを浮かべた。
「部下の行動を知る。それも大切な上司の役目だからな」
「あのな、部下、部下というけど、ついこの間までは同期だろう」
「甘いな、階級が一つでも上がれば私はれっきとした上司。だいたい上司に向かってお前はないだろう、堂本さんと呼べ」
千春の顔が、少し癇癪(かんしゃく)を含んだ顔にかわった。しかし、警察という組織に居るからには、階級が上がった美佐子が上であるのは間違いない。
「……わかりましたよ、堂本さん」
「ところで千春、何の為に、あんな山の中に行った。今日だけじゃない。時折行っているな」
そこまで知られているのでは、無理に隠す必要もなかった。

「立ち枯れだ、立ち枯れを調べている」
「何だ、それは？」
立ち枯れと聞き美佐子は、腑に落ちなかったのか、くっきりとした細い眉を寄せて千春を見つめた。
「仕方ないから話す。ただ、僕の邪魔はするなよ」
「いつ、私が邪魔をした。お前の邪魔をした事はない」
「そう剥きになるなよ。仕事の邪魔はしないが、私生活の邪魔は多いにしている」
「私生活の邪魔？　そのような事はした覚えはない」
「……僕が、山崎美子と歩いていたら、お前紹介しろと割り込んできた」
「あれは邪魔ではない。お前がふらふらした男だから、私がしっかりと監視をしているだけだ」
「別に美佐が僕を監視する事もあるまい。美佐が現れるとうっとうしい」
「彼女といちゃいちゃ出来ないからか？」
美佐子は目立つ女だ。世間一般に言わせれば美女なのであろう。小顔のなかに大きなく

っきりとした二重瞼の目、すっと通った鼻筋、笑えば綺麗な歯が覗く。此といった難のない清冽な顔立ち、そんな容姿をした美佐子がデート中にしゃしゃり出て、千春に馴れ馴れしくすれば、相手の女性もおもしろくはない。それで旨く行かなくなったのは、一度や二度ではない。

美佐子に、その意識がなくとも、千春にすれば迷惑であった。

「いいか、私は、お前の両親から”美佐ちゃん頼む”とお願いされた。だから仕方なく監視をしている。好き好んでお前の彼女に逢っているわけではない。御両親に対して報告の義務が私にはある」

「僕もすでに三十を過ぎた。お袋達が何を言ったか知れないが、昔の僕とは違うけどな」

「何処が違う、寝言を云うな」

駄目だ。いつもそうだが、美佐子には口ではかなわない。いや、力でも、おそらく負ける。美佐子の父親は、合気道の師範で道場を構えていた。美佐子は、その父に小さいときから合気道を仕込まれている。見かけからは想像もできない程の腕前を持っている。

一方の千春は、いまでも小柄であるが、それは子供の時から変わってない。名前も小柳

千春と女のような名前のうえ、小柄でやさしそうな顔つきをしていたため、子供の頃は良くからかわれもした。それを何かと助けていたのが美佐子であった。美佐子は小さいときから大柄であった。まして中学生くらいまでは、発育にしても女子の方が早い、二人の身長差は今よりも大きかった。体格的な事もあり千春にとっては、子供の頃から頭の上がらない存在が美佐子であった。しかも、家が隣同士であったため、互いの性格なども知り抜いている。それが、また千春には厄介でもあった。

子供の時に染みこんだ苦手意識は、大人になっても、なかなか消えないものである。それは解るとしても、美佐子の前では、少々情けなく見える。

「くだらない話は、そこまでだ。その立ち枯れがどうしたというのだ？」

「高萩から袋田に向かう途中の山の中に、誰も近づかないような小さな沼がある」

「今日も、そこに行ったんだな」

千春が頷いた。

「その沼の周辺が枯れているのか？」

「そうだ」

「千春が、なぜ立ち枯れを調べる。管轄違いだろう」
「警察は、なにも犯罪者だけ捕まえるのが仕事ではないだろう」
道案内から、住民の困り事、有害動物の捕獲と幅広い仕事をしているのが警察である。
「まあ、それはそうだが、しかし、立ち枯れは違うだろう」
「柿岡の叔父貴に頼まれた」
「柿岡の叔父様に？　……それで千春は茨城まできたのか？」
「いや、違う。叔父貴から話しがあったのは、此処にくるのが決まってからだ。茨城に行くなら仕事の合間で良いから、少し調べて欲しいと頼まれた」
「すると千春は、何で茨城にきた？」
「それは聞かなくても解るだろうに」
「私から逃げたつもりか？」
「……そうだ、悪いか、美佐は僕にとっては天敵のようなものだ」
「別に悪くはないが。まあ、おあいにく様、相棒が欲しかったのに私で」
千春が口を”へ”の字に結んだ。そのとき刑事課長の大杉が部屋にやってきた。

大杉が、手でお猪口を翳すまねをして「春さん、今夜どうだ」と誘ってきた。
「僕は構いませんが、課長のところ、今は忙しいのでは？」
「大丈夫だ、例の郵便局に入った強盗は逮捕した。まあ、今日は、その祝賀を兼ねて、過ぎ去る夏に乾杯をしようと思う。堂本さんも、よかったら一緒にどうぞ」
「あら、よろしいのですか？」
美佐子の口調が、さっきまでとは打って変わり女らしい言葉になった。
「勿論、かまわないですよ」
「有り難う御座います」
美佐子は丁寧に挨拶をしていた。その変わり身の早さを、千春は呆れた思いで眺めていた。
夜の八時になった。署から、それほど離れていない居酒屋に、刑事課の面々が集まり酒を酌み交わしていた。大杉の横に千春達の席は設けられていた。
既に美佐子も刑事課の面々とは親しくなっていたので、席を立って課員に酒を勧めていた。

「春さん、いい娘ではないか？」
「美佐がですか？」
「そう、春さんから悪魔だと聞いたときには、どんな娘がくるかと気を揉んだが、明るい素直な娘さんではないか。署内でも評判だぞ」
「……皆さんにはね」
「春さんには辛く当たるのか？」
「そんな事もないですが、とにかく苦手ですよ」
「春さんの幼なじみだろう。春さんの事は何でも知っているという事か？」
千春が仕方なさそうに頷いた。大杉も大分酒が回ってきたのであろう。千春の困った様子などには無頓着に、好き勝手をいっていた。
「いいか、春さんみたいな性格をした男には、少々、利かん気な娘の方が合う。ちょうど良いと俺は思うが？　それにあれだけの別嬪さんなら文句はあるまい」
「課長、勘弁してくださいよ」
「どうしてだ、春さんの後を東京から追ってきたと、みんな噂している」

「そんな事はないですよ。それにあれだけは駄目です」
「春さん、手をつけて逃げているのではないだろうな。警察というところはだな、とりわけ署内の男女関係には厳しいぞ」
「冗談でありませんよ。いうなれば僕の天敵です。そんな女に手を出しますか？　いえ、それに万一、手など出そうものなら、僕は美佐に殺されますよ」
「おいおい、それだけはやめてくれよ。警察官同士が痴情の縺れで殺人などとあっては洒落にもならない」
大杉がにやにやしながら話した。
「あり得ないですから、御心配なく」
大杉が笑い出した。千春は、少し赤らんだ顔の眉を寄せていた。

翌日の刑事課分室。
「昨日の話しの続きだけど、何処まで千春はその沼を調べた」

「水質分析、土壌分析、そこまでは終わっているが何もでなかった」
「何もでてない？　害虫は」
「定期的に沼に行き、調べては見たが害虫の発生もない」
「白鷺（しらさぎ）や鵜（う）はいないのか？　沼があるんだろう」
鳥が大量発生して植物に糞を落とすと、松でも杉でも枯らしてしまう事がある。山中の沼であれば、これらの野鳥が住みかとするには恰好の場所である。
「ないな、植物を枯らすほどの大量の糞が有れば、すぐにわかる」
「立ち枯れの原因となると、その他に色々とあるな」
「イノシシ、鹿、猿、酸性雨」
「それらは？」
「今のところ考えられない」
そうかと美佐子は頷くと、
「……その付近で何か工事などはしてないのか？」
「最近はしてない」

「前には？」
「だいぶ前に花貫ダムが造られているが、これは現場から可成り遠い。この工事の影響は考えられない」
森林の立ち枯れは、環境の変化によっても起こる。例えば、本来浸透する筈の雨水などが、道路、護岸工事、ダムなどの建築物により、水の流れが変わった場合などである。環境が変わると地表面を流れていた水により、生きてきた土壌（どじょう）微生物（びせいぶつ）などに変化が起き、それが原因で植物の根が腐ったりする。
「酸性雨は？」
大規模に森林を立ち枯れさせる原因の一つには酸性雨がある。
酸性やアルカリ性を示す単位にｐＨ値がある。この値では七が酸性とアルカリ性の中間値で、中性の性質を示す。七より小さい場合が酸性領域であり、七より上がアルカリ領域を示す。また、酸性やアルカリの強さは七より離れるほど強さを増す。
普通に降る雨を測定すると、僅かながら酸性を示す。これは大気に存在する二酸化炭素を取り込み、弱酸性の雨となって降ったりする為である。

酸性雨と呼ぶ場合は、一般的にｐＨ値で大凡五・六以上の強い酸性を示したものを酸性雨と定義している。強い酸性を示す原因は、車や工場等から排出される色々な化学物質を雨が取り込む事によって起こる。立ち枯れが広範囲に起きているようであれば、酸性雨の影響を考えないとならない。

「立ち枯れは限定的、それに山の中だ。国道からも離れている。工場なども付近にはない」

「遠いか、近いかは余り関係はないだろう。気流とか風向き、地形の特性などによって濃度の高まる場所は違ってくる」

「それはそうだが」

「立ち枯れの状態は？」

「沼の周囲だけに限られている」

沼の周囲だけに限られているとなれば、酸性雨というより、やはり千春が疑っているように、何か沼が悪さをしていると考えるべきだろうと美佐子も思った。

「現場を見てみたいな」

「しょうがない。次のとき連れて行くよ」
「次って、いつだ」
「特に決めてはいない」
「だったら、すぐだ」
「暑いぞ、少し待てば涼しくなる。それでよいだろう」
「暑さは関係ない、すぐにだ」
「……わかったよ。二、三日のうちに行く」

四

数日後、二人の姿は高萩の山中にあった。車を山中の道路側に停めると、そこから細い山道を三十分位は歩かないとならない。
「美佐、だから言ったろう。スカートなど履いてくるなと」
「厭だよ。ズボンは嫌いだ。それでなくても、そんな物、履いて外に出たら、何しに行くと思われるだろう。私だって、署に来てそんな日が経ってないんだから周囲の眼は気にな

る」
「ほう、美佐でも一応人眼を気にするのか？」
「当たり前だろう。千春のように、よれよれの服を着る趣味は私にはない」
「恰好ばかりつけていても、中身がなかったら同じだ」
「あら、御免なさいね。私は中身も有ってよ。ないのはあんたでしょう。中身がないんだから、責めて外見ぐらいはシャキッとしたら」
「大きなお世話だ」
そんなやり取りを続けながら、山中を進むうちに、二メートル位の急斜面を登る場所にきていた。
「昨日、言った筈だ。途中一カ所、急斜面があると」
美佐子の履いているタイトスカートで登るには厳しい場所であった。
「千春、先に登り横を向け」
「どうするんだ」
「だから、こっちは見るな」

「勝手にしな」
千春は先に、その急斜面を登った。しかし、さすがにこの斜面は女一人では厳しいと思い美佐子に手を伸ばした。
「こっちを見るな！」
額に汗した美佐子は、そういうとタイトスカートの裾をまくった。
「おい、何を見ている。手を差し出すなら、顔を向こうに向けろ」
「わかったよ」
仕方なく千春は土手の下に手を伸ばし、顔を横に向けた。
美佐子の手が伸びてきた。千春は、その手を、握ると美佐子を傾斜から引き上げた。
「おい、見たろう。私のパンツ」
「見る分けないだろう。お前のパンツ見てどうする」
呆れたように千春が美佐子を見ながら口をとがらしていった。
「変な気、起こすなよ」
「ほう、美佐も僕を男だと認めているのか？」

「あほ。思うか。しかし、私は魅力の有りすぎる女だからな。妙な気を起こさないとも限らない」
「まあ、自分で言っているなら世話はないよ」
呆れたように千春がいった。
しばらく進むと、山間が開けてきた。遠くからでも深緑の杉林の中に、灰色をした立ち枯れをした杉の木が見えた。
「あの先が沼だな」
「そうだ」
すぐに沼が見えてきた。林の窪地に出来た沼、そのような感じを受ける沼であった。沼は楕円に近い形をしている。ざっと見た目には長辺側で二百メートル程度、短辺側百二十メートル位であろう。山中にある無名の沼としては割と大きい。
しばらく、美佐子が眼を細め、沼や周囲を見回した。
「なるほどな。これでは最初に有害物質を疑うのも無理もないな」
美佐子の目に飛び込んできた風景は、沼の周囲の杉などが、きれいに沼の周囲に沿って

十メートル位の幅で枯れていた。誰が見ても、沼が何か悪さをしているとしか思えない枯れ方であった。
「これで沼の水からも周囲の土壌からも、おかしな物質は検出されてないのか？」
「何カ所かでサンプルを取り、科捜研で調べたが、何も出なかった」
美佐子は沼の周囲を歩き出した。千春も、それに続き歩き出した。時折、周囲に目をやったり地面を調べたりした。
「動物が木をかじった様子はないな」
「この辺は居てもイノシシくらいのもの、鹿や猿は生息してない地域だ。居たとしても動物が沼の周囲の木だけを一斉にかじる。それはないだろう」
何度も来ている千春が、そのような物を見逃す筈もない。害虫などによるものであれば、きれいに沼を中心に立ち枯れが広がる事もないだろうと感じた。
これといって手掛かりになるような物も、美佐子が見る限りでは何もなかった。そうなると、やはり疑わしいのは沼であった。
「ここの水は、雨水の溜まったものか？」

「いや、そうではない」
「ここは沼だろう、違うのか？」
「雨水なども溜まるだろうが、すぐ近くに川がある。その川から水が来ている」
「すると大雨なら、この沼の水位は、すぐに上がるな」
「いや、そうでもないと思う」
「どうして？」
「この沼は川から入る水路と川に出る二つの水路を持つ。この沼は、いわば川のバイパスのようなもの。一旦、川から別れた水が低地に溜まり沼を作ったが、沼の水が、また低地を探し流れ出た先には、元の川があった。土地の高低差から、そのような作りをしている」
「すると沼の水は、循環しているんだな」
「そうなる」
「それじゃ、逆に沼の水の影響は考えにくい」
川から流入水があり、また、川に水が戻されていれば、たとえ何かの拍子に沼が汚染さ

れても、それらはすぐに川に流されていく。
「しかし、確認した方が良いに決まっている」
千春は、少しむっとなった。
千春とて、それは考えた。しかし、一時的に毒性の高い物質が沼に入れば、いくら流れがあるとはいえ、周囲に影響を及ぼさないとも限らない。そのために調べていた。その結果として、沼の水質にも周囲の土壌にも異常がないと言えるのである。
沼の構造から簡単に否定をされては千春も不機嫌になる。尤も普段であれば、この程度の事で不機嫌になる千春ではなかったが、相手が美佐子だと、千春もすぐに剥きになった。
「怒るなよ。別に、千春のしている事に文句を言った訳ではない。元々、千春は理工系の人間、一つ一つ疑問を潰していくのが千春のやり方だろう」
「そうだ。それが僕のやり方だ」
「幾ら出の水路が有っても川の水位が高ければ戻りきらない。沼の水位が上がり、周囲に水が回ったとも考えられるだろう」
「沼の縁から水面までは一メートル以上はある。この縁を水が乗り越えるには相当、川の

水が増えないと無理だ。そんな事は度々あるまい」
「それでも可能性はあるだろう」
「それはないとはいえない。しかし、この沼は川の一部と考えれば一時的に水位が上昇しても、川の水位が下がれば一緒に下がる。大雨などで川の水位が上昇しているのは精々数日。その程度の日数、水に浸かったくらいでは大きな木は枯れはしない」
二人は枯れた木のそばに立っていた。
美佐子は、履いていた運動靴で地面を何度か蹴ってみた。距離は沼から十メートルぐらいの場所である。人が歩いて踏み固めるような場所ではない。まして、これまでは杉が育っていた場所、葉などが落ちて腐葉土になっているのであろう。わりと柔らかい地面であった。全体の地形が擂り鉢状をしている。沼の縁を乗り越え、立っている場所まで水が来るには、二メートル位は沼の水位が上昇しないと無理だと感じた。
この沼に繋がる川の大きさや流れなどについて、美佐子は知らないために、何とも判断のしようがないが、その辺の調べを怠る千春ではない。その千春が否定をするなら、水の上昇による考えは無理なのだろう。

おかしな枯れ方をしていると、再び周囲を見た。
「なあ千春、こんな人里離れた山奥にある沼の異変に、柿岡の叔父様は、何故気づいた」
「叔父貴が、茨城の出身なのは美佐も知っているな」
「それは知ってる、この近くだったのか？」
「ここからそんなに離れていない日立市という町の生まれだ」
千春が美佐子に語った事によれば、一昨年に地元での同窓会があったときに、柿岡は狩猟をしている友人から、この沼の話しを聞いたという。柿岡は、その話しを聞いたとき、柿岡の生まれた日立市から、隣接する勝田市にかけては戦中には中小の軍事工場が多くあったのを思い出した。しかも、その日立市から勝田市の海岸線は、終戦直前には千葉の九十九里とあわせて、米国が上陸をするには尤も適した砂浜として、日本軍は米軍の上陸にそなえ、警戒をしていた。そのため終戦まで勝田市には、数千人の兵士が駐屯をしていた。
この地では戦後のどさくさに紛れ、兵士により山中に何かが運び込まれたらしいなどの噂が流れた。その噂を柿岡も、両親から聞いていた。
柿岡は、沼の立ち枯れの話を友人から聞いたときに、それを思い出し旧日本軍の変な薬

品や化合物が山中から出てきて、住民に被害が出ては堪らないと思った。それに昔の話しは別にしても、目立たない山奥である。よからぬ物が不法投棄されている可能性、そのような考えもあった。

そんな折りに千春が茨城に転勤を願い出たのを知り、それを幸いに、少し調べてくれないかと千春に頼んでいた。柿岡が心配したような化学物質などは検出されなかったのは、すでに柿岡には伝えてあると千春はいった。

「それじゃ、もう調査は終わったのか？」

「一応は済んでいる。ただ、この枯れ方が気になる」

そう話す千春の横顔を美佐子はじっと見ていた。男にしては長い睫毛を持つ、目も丸みを帯びた優しい目である。元々が優しい男。それが千春である。しかし、千春はただの優しいだけの男ではない。結構度胸も据わっているし、大胆な面もある。見かけほど柔な男ではないのを美佐子は知っている。それがあるから千春に対して、美佐子は何でも平気で言える。

五

朝夕と昼との寒暖の差が大きくなると、季節は流れ込むように秋へと変わっていった。すこし肌寒く感じる暗い事務所で、武内一成は数年前の事を考えていた。当時の武内一成には焦りがあった。

武内は三年前まで経済産業大臣として権力の中枢に座っていた。ところが一連の年金不祥事や官僚天下り問題などが発端となり、急激に民意は自由民優党から離れ総選挙で惨敗をするに至った。先の参議院選で過半数に届いていなかった自由優民党は、その日を持って長らく続いた政権の座を、野党であった民誠党に明け渡す事になった。

これまでの人生に於いて、武内は凡そ挫折と云うものを知らずに、大臣までのし上がってきた男である。経済産業省エリート官僚から三十代の若さで自由民優党候補として選挙に臨み当選。その後も党内最大派閥をバックとして自由民優党副会長などの党要職を歴任して、先の内閣では二回目となる経済産業大臣に就いていた。何れは総理大臣との声も周囲から漏れ聞こえ始めていた時期の政権交代であっただけに悔しさは人一倍大きなものがあった。

そんな武内に追い打ちをかけたのが、人生で始めて味わう挫折と屈辱であった。政治は数の論理。言い尽くされた言葉であるが、数を失う事がどれほど辛いものであるかは実際に味わえば、否応なしに骨身にしみてくる。

与党時代、それまで何かに付けすり寄ってきた官僚は、政権を失った日を境にぴたりと足が遠のいた。野党に転落して間もなく武内は、委員会資料について省に説明を求めた。与党時代であれば省は、局長以上の幹部職員が説明に飛んできて細心の注意を払って説明をしていた。立場が野党になると説明に赴いたのは薄っぺらな資料を携えた課長クラスの職員。それも説明の仕方までが、がらりと変わっていた。通り一遍の説明や要領の得ない説明に始終する職員の姿に、武内は少なからず驚いた。

当初は我慢できずに声を荒らげもした武内であったが、職員も馴れたものである。神妙な顔をして聞いてはいるが、一向に態度を変えようとはしない。怒りから、ついぞ拳を握りしめたのも一度や二度ではない。やっとの思いで気持ちを納めた記憶は、今でも鮮明に残っている。しかし、時間が経つに従い、そのような事にも馴れてきた。与党と野党の違い。悔しさは消えずとも野党になったのでは、現実として受け入れざる得なかった。

官僚の変節、当初は、さすがに戸惑いもしたが、今となっては、どうでもよい事に思えた。ただ、これまで与党として、また政権の中枢で自分達の思いのままに、法案の作成や決定をしてきた武内にすれば、政策決定権を失った立場には、それ以上の虚しい物を感じずには居られなかった。

この状況を打破するには、再び政権に付くことである。当然であるが武内に限らず、自由遊民党の最大目標は、再び政権を取り戻す事にある。しかし、新たに誕生した早川内閣は、高い国民の支持率を受けたまま、地球温暖化防止の為の炭酸ガス二十五％削減案を引っさげて、華々しく国際舞台にも打って出た。新政権は国内だけでなく、国際信用を高める努力にも余念がなかった。益々高まる国民の支持に武内は忸怩たる思いで、その様子を見ていた。

野党に転落した当初、政権奪回（せいけんだっかい）を強く誓った武内であるが、一度、国民からノーを突きつけられた政党が、それほど簡単に政権奪取（せいけんだっしゅ）ができるほど甘くないのは、伸び悩む政党支持率が雄弁に物語っていた。武内は、このまま従来通りの自由遊民党の政策を訴え続けても、再び政権中枢に返り咲くのはできないと思った。

しかし、不思議なものである。よく考えてみると自由遊民党は先の総選挙により、党内有力大物議員の落選が相次いだ。野党（やとう）に下野（げや）したとはいえ、相対的に武内の党内での地位は上がり力は増大している。もし、次の総選挙で自由遊民党を勝利に導くような働きができれば、そのときは総理大臣の椅子が転がり込むかも知れないのであった。総理大臣への最短の道が用意された。そう考えれば下野を悲観する必要もなくなった。

武内は、でっぷりとした大柄の身体に、如何にも精力的と思わせる脂ぎった丸顔、意志の強さを思わせる黒々とした太い眉と瞼の垂れた三角目、そして大きな造作の鼻と口を持つ代議士である。その三角目に、失われていた光が、その時から戻りだした。

総理になる。それには何としても自らの手によって、次の選挙で党を勝利に導く必要があった。次の総選挙で政権を奪回する。残された期間は三年。

一つの起死回生（きしかいせい）策を頭に描き、自ら総理大臣になると武内が心に決めたのは、政権交代が起きて半年が過ぎた頃であった。それから、すでに二年の歳月が流れた。いよいよ来年の秋には衆議院は満期となる。武内が待ち望んだ選挙の年であった。そのために武内は、これまで着々と準備を進めてきたのだと自分を奮い立たせていた。

待つのは永かった。しかし、二年の歳月は武内に有利にも働いてきている。なんといっても政治情勢が変わってきた。自由遊民党が大敗した一因には、当時起きていた世界的な不況もあった。その影響は新政権になると益々強まっていた。そのために、政権運営に不慣れな事も手伝い民誠党は、不況下で藻掻き苦しんでいた。高い支持率を誇ってきた民誠党も、今では大きく支持率を落としていた。運も我に味方をしてきた。そう思うと武内の脂ぎった顔には、薄ら笑いが浮かんだ。

坂口康男は、今年二十九歳を迎える、長身の痩せた男だった。坂口は紅葉には少し早い袋田の滝を見ていた。袋田の滝は茨城県大子町にある大きな滝で、茨城の観光地の一つになる。

坂口は袋田の滝が好きだった。轟音響く滝の近くで、時には冷たい水飛沫を浴びながら頭を空っぽにするのも良かった。遠くから、白い糸のように流れる滝と自然の香りの中に身を置き、誰にも邪魔される事なく物思いにふけるのも良かった。滝は、子供の時から坂

口の一番好きな場所であった。その一番好きな滝を前にしても、今日の坂口の顔は沈んでいた。

坂口は二年ほど前は、北山産業グループに務める会社員であった。会社員といっても仕事の内容は、北山産業筑波研究所で食品冷凍技術の開発をする研究職をしていた。

――あれから二年か……。

坂口は心の中で呟くと当時を思い出していた。

その朝、坂口は上司である堀田に呼ばれ誰も居ない会議室の一室で、堀田と話しをしていた。堀田の話は北山産業を辞めて、堀田が新たに作る研究所に移籍をしないかとの誘いであった。

北山産業は、それほど世間に名前が浸透した企業ではないが、それでも物流会社としては中堅どころに位置する。数年前には東証一部に上場も果たしている。自前の技術開発をするために筑波に研究所もあり、そこに勤める坂口は。今の仕事に不満はなかった。

堀田からの話しがあっても坂口は、北山産業を辞めるつもりはなかった。断ろうとした坂口の様子に気づいた堀田が続けた。これは北山産業も了承している。いや、了解という

よりも会社の意志だと坂口に告げ坂口の退路をたった。ただ、会社が何故、了承したかとの詳しい話しは堀田からはなかった。

坂口は、堀田の言葉を何処まで信用してよいのか解らずに、数日、考えさせて欲しいといった。その間に移籍の話しは坂口だけでなく、冷凍関係の同僚研究員である山下や早野までが了承していたと知った。所内の様子をつぶさに観察した坂口は、やはり堀田の言った通り、北山産業側も承知していると気づいた。

北山産業筑波研究所は、研究員、数十名の、それほど大きな研究施設ではない。冷凍関連の技術者は、堀田を頂点とした山下、草野、坂口の四人体制であった。その四人全てが新たに設立される研究所に移籍すれば、北山産業筑波研究所から冷凍関連の研究体制が、すっぽりと抜け落ちる事を意味していた。そのような状況では、仮に、一人、このまま北山産業に残っても、おそらく冷凍関連の研究は続けられない。

坂口の実家は茨城県の大子町にある。坂口は、袋田の滝の凍結を見て育った。子供ながらに、滝の凍結は凄いと思った。それが興じて冷凍というものに興味を持って今日に至っている。坂口は冷凍関連の研究を続けたかった。坂口は、何か不自然なものを感じながら

も堀田からの話しを受け入れた。
しばらくして坂口は堀田の下で、ある研究を始める事になった。堀田から渡された、手書きの古い論文を眼にしたとき坂口の表情は曇った。
あれから二年が過ぎた。坂口は自分は誤った道を歩いていると感じていた。
坂口は、堀田の下で新たな研究を始めるとき、自分自身を納得させる理由を探した。見つかった。それはおそらく試験を正当化するには、余りに小さな言い訳であった。しかし、その小さな言い訳で自分を納得させる事ができなかったら、堀田の下での試験は続けられなかったと思った。
「今年の冬も沢山の人を、この滝に集め喜ばせる……」
ずっと滝を見つめていた坂口が、何かを決心したように呟いた言葉であった。

第二章　袋田の滝

六

「なあ、千春、たまには私を何処かに案内するという気にはなれないか？」
「おっと、それはデートの誘いか？」
「馬鹿か。折角、茨城の自然豊かな場所に赴任してきたんだから、その辺を案内したらと言っている」
「何故、僕が美佐を案内しなければならない」
「千春が先に茨城に来た。そして私は後からきた。理由はそれ。近間を案内したからといって罰は当たるまい」
あっけらかんとした表情で、美佐子が千春を見ながら話した。くっきりとして細い眉に大きな瞳が、小作りの顔にバランスよく収まっている。たしかに美佐の顔は美しいのかも知れないと千春も思った。ただ、その美しい顔から発せられる声は、千春には悪魔が奏でる声にしか聞こえなかった。
断ろうとした。しかし、そのとき千春は、ふと例の沼の近くにある袋田の滝なら自分でも一度は、見ておきたいとの思いがした。千春は自分の気持ちを悟られないように、仕方ないとの素振(そぶ)りを装い美佐子の言葉に頷いた。

翌日の休みを使い、千春は袋田の滝に美佐子を案内した。

袋田の滝は和歌山県那智の滝、栃木県華厳の滝とともに日本三大名爆の一つに数えられる高さ百二十メートル、幅七十三メートルの滝で四段の岩場を流れ落ちる滝として知られている。

袋田の滝は別名、四度(よんど)の滝(たき)とも呼ばれている。これには二つの説があり、四段の岩場を水が流れる落ちる姿から、四度の滝と称したとする説。もう一つは西行法師が四季に一度は訪れないと、この滝の良さは解らないと言った事から、四度の滝と呼ばれているとする説である。

春には新緑に包まれた美しさの中に白く糸を引いたように浮かぶ。夏には豪快な水飛沫を飛ばし涼しさを醸し出す。秋は紅葉が渓谷を彩り、滝を引き立たせる。冬には、凍り付いた滝が人々を魅了する。西行法師がいったとされるように、四季折々で楽しめる観光地でもあった。

この袋田の滝のある大子町は茨城県北西部、福島県との県境にあり面積は茨城県の約二十分の一を占める大きさを持つ。面積の約八割は阿武隈山系と八溝山系からなる山岳地で、

山間を流れる中小河川が多く、これらは町の中央を流れる久慈川へと注ぐ。群馬や栃木などの北関東各県に比べると雪は少ないが寒冷な地域でもある。その為に冬は滝が凍結する。

もっとも残念ではあるが暖冬の影響からか、時が平成に入ると袋田の滝が全面凍結する事は、希にしか起きなくなった。部分凍結でも、また違った楽しみ方があるが、やはり全面凍結の魅力にはかなわないのか、滝が全面凍結しないと冬季の客足が落ちるのも仕方なかった。

千春が、ここで美佐子の義理立てをしようと考えたのは、大子町は千春達の住む高萩市と隣接している。そのために距離的にも近く訪れるには手軽である。午前中に滝を美佐子に見せて、昼食でも一緒に食べれば、それで十分義理は果たせる。千春にしたら休日の、午後まで束縛されるのはまっぴらであった。

袋田の滝は、四季の中で尤も人が多く集まる紅葉の時期を迎えて、多くの観光客で賑わっていた。駐車場に車を停めた千春と美佐子は、そこから滝の見学のために作られてる観瀑台(かんばくだい)に行くために滝川の上流に向かって歩き出した。

第一観瀑台付近にくると二人の前に、滝が迫ってきた。二人とも、袋田の滝に来るのは始めてとあって、間近から見られる滝に見入っていた。季節もちょうど良かった。周囲の赤や黄色に色づいた木々の中で幾重にも白い筋を曳く、滝の雄大な姿に二人とも一瞬、言葉を失っていた。

しばらくして「凄いね」と美佐子がいった。

そうだなというように千春も素直に頷いた。そのとき、

「この滝が凍ったら凄いね」と、近くにいた年輩の観光客に手を引かれた子供の、話す声が耳に入ってきた。

「そりゃ、凄いよ。暖冬で最近は余り凍らないが、昔は良く凍っていたよ」

「でも去年は、凍ったって。今年も凍るといいね」

「滝が凍ったら見に来るか？」

「見たいよ」

観光客の話を聞きながら、千春は滝が凍ったときの姿を、漠然と思い描いていた。

この滝には新旧二つの観瀑台がある。新しい観瀑台に三つのデッキが作られている。新しい観瀑台に行くには、もとからある観瀑台裏手にあるエレベータを使えば行ける。

「上まで行って見ようか？」

そう誘ったのは千春からであった。

エレベータで約四十メートルを登ると、そこには第二観瀑台があった。ここには三つのデッキがあり、階段で、その最上段まで登ると第一観瀑台より五十メートルくらい高い場所から滝が見える。

二人は観光客の中を縫って、最上段のデッキに立っていた。

「珍しいな千春が、ここまで連れてきてくれるとは？」

滝を観ながら、ぼそっと美佐子が呟いた。千春の性格は知り抜いている。最初の観瀑台から滝を観れば、さあ帰ろうといい出すと思っていただけに、美佐子は少し意外な気がしていた。

「別に、お前に見せたいから、ここまで登ってきたのではないぞ」

言い訳をするように、千春がチラリと美佐子を見た。

四段に岸壁を流れ落ちる滝のために、下からでは滝の上段は小さくしか見えない。しかし、ここまで登ると二つの山が重なる中から、突如として現れる、大量の水の湧き出す所まで、しっかりと見ることができた。

「なあ、美佐、この少し先だ。前に行った沼があるのは」

そう、いって千春は滝の先を指で示した。その姿をちらりと美佐子は見た。やはり、そんな事であったかと美佐子は少し、きつい顔になった。

千春が簡単に自分を観光地などに連れてくるとは思わなかった。千春自身が、あの沼に絡んで滝を見ておきたい、そのような気持ちがあったと思うと、美佐子は少々腹立たしい気持ちになっていた。それでも滝の美しさは、そんな考えを凌駕(りょうが)するものがあった。

七

二人は滝から戻ると名物である奥久慈そばを食べる為に、滝の近くにある観光食堂へ入った。

「これで、今日の僕はお役、御免だな、いいな」

そばをつまんだ箸を止めて美佐子が、千春を不思議そうに見た。目と目が合ったとき、これは不味いと思った。案の定、美佐子の口からは、
「なにいってるのよ。これからが本番でしょう」
そら悪魔が顔を覗かしたと思った。
「これで十分だろう。これ以上は上司に対する接待は不要だ。何が本番だよ」
「そうか、それならこれからは、幼なじみとしてのよしみだな」
「幼なじみのよしみ？」
「そう、数日前にテレビが壊れた。テレビを買わないといけない」
「……今日、呼び出した本当の目的は、それか？」
美佐子が口元に笑いを浮かべ頷いた。
「だったら最初からいえよ」
「素直にいったら、千春は付き合ったか？」
電気店に行くのが目的とわかっていたら、付き合う事はなかったと思った。
「……」

「それみなさい。上司の権限でも使わなかったら、千春は私には手をかさない。そうだろ」
「当たり前だ」
「どうして、そこまで私を嫌う」
「自分の胸に手を当てて考えて見ろ」
美佐子が戯(おど)けて胸に手を置いた。
「何も浮かばない」
済ました顔で答えた。
「……そうか。でも僕はいやだ。テレビなんか電気屋さんに頼めば設置までしてくれるだろう。電気屋さんに頼むんだな」
「嫌だ」
「どうして」
「今日、見たいものがある。買っても配達されるまでには数日かかる」
「我慢しろ」

「嫌だ。幼なじみだろう。そのくらい何とかしろよ」
「あのさ、それが人に物を頼む態度か？」
「じゃ、どうすれば良い」
「……人に物を頼むならきちんと頼め」
「きちんとか、――どうか、このか弱き乙女の為に、手を貸してください」
無表情のまま美佐子がいった。この野郎とは思ったが、自ら頼めばといった手前もある。仕方なく千春は、食事が済むと美佐子を伴って家電量販店へと向かった。
テレビは薄型液晶、省エネルギー型の少し大きめの物を買った。これで済んだと千春が思うと、次に美佐子はエアコンの展示している場所に足を進めていた。
「なんだよ、テレビだけではないのか？」
「テレビは欲しいといった。それだけとはいわなかった」
「エアコンは取り付けが必要、それは僕には出来ない」
「わかっている。エアコンは電気屋さんに頼む。来たついでだから機種を決めて行く」
「あの部屋にエアコンはあったろうに」

「古い物だ、この御時世。国を挙げて地球温暖化の防止に取り組んでいる。省エネ家電に変える。国民の一人として地球温暖化を防ぐ為に協力するのは当たりまえだろう」
「大袈裟だな」
「ちっとも大袈裟ではない。塵も積もれば山となるのが、省エネ」
一応、理屈にはなっている。地球温暖化に協力していると云われれば、表だってそれを駄目だと、反対する理由は千春にもない。
日本社会は人口減少や後発国の技術革新などに伴い、経済の低迷が続いている。しかし、日本は省エネ技術やエネルギー分野では定評のある国である。その技術を使える日本にすれば地球温暖化の問題は、新たな産業を育成する大きなチャンスでもある。新政権は、そこに大きく舵を切ったのであろうと千春は思った。
折からの世界的な不況も手伝い、経済浮揚策を模索して政府は、つい最近も、省エネ器機への買い換えや、化石燃料からの転換である太陽光発電や風力などの自然エネルギー開発分野に、補助金を出すなどの経済支援策をとっていた。
今なら、その補助金で省エネ家電が安く買える。しっかりしている美佐子は、その辺に

敏感に反応したのだろう。
「地球温暖化、様々だな」
少し皮肉を込めて千春が言ったが、そんなもので動じる美佐子ではなかった。
「安く買える、こんなチャンスを逃す必要ないでしょう」
「まあ、そうだな。しかし、不思議だな」
「何が不思議なんだ」
「僕らが子供の頃は、地球は寒くなると聞かされていた」
「それは昔の話し、今は地球は暖かくなっているのだから、仕方ないでしょう」
確かに千春が述べたように、数十年前は地球は寒くなると言われていた。それが今は地球は温暖化である。僅かな時を経て真逆の方向が示されている。どうして、そのように変わってしまったのか、千春は不思議な気がした。
千春と美佐子は、車に液晶テレビを積み込んで、その店を後にした。

『沈む氷』　試し読みでした。　ここまでのおつきあい、ありがとうございます。